

訪問日：2017. 11.4 / エリア：奈良市

たんぽぽの家



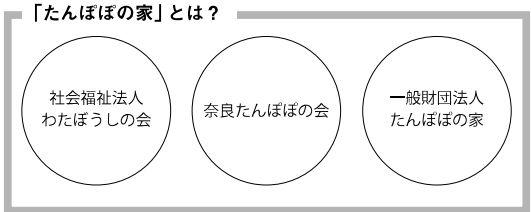
回答者 岡部 太郎さん(一般財団法人たんぽぽの家常務理事)

たんぽぽの家活動概要

たんぽぽの家は、一般財団法人たんぽぽの家（以下、「財団」と表記）と社会福祉法人わたぼうしの会（以下、「社福」と表記）の2つの法人、そしてボランティア団体である奈良たんぽぽの会が運営しています。財団は、国内外の障害とアート、ケアに関するネットワークづくりやアートプロジェクトの実施が中心で、国や自治体、企業などの助成金や協賛金で運営しています。社福は、アートセンターHANA（以下、「HANA」と表記）や Good Job! センター香芝を含めた、地域に根ざした障害者福祉サービス運営が中心です。守備範囲の違う法人があることで、障害福祉の現場と国内外のジャンルを超えた取組で相互補完し、それをボランティア団体である奈良たんぽぽの会が支えるという構図です。

HANA を利用しているメンバーは60名程です。主に火曜日から土曜日の 10:30-15:30 まで、それぞれが自宅や敷地内の福祉ホームから通っています。

活動は多様で、絵画・陶芸・織物・フェルト作りからダンス・演劇・書・ネイル講座・ヨガなど様々。ひとりひとりに合うプログラムをメンバー、家族、スタッフが相談のうえ決めていきます。しっかりと仕事をしたい、自分の表現活動を大事にしたい、生活を充実させたいなど、メンバーによって違う目標を尊重したうえでプログラムを組み立てています。



活動が始まった経緯、スタッフの多様さ

もともとは奈良県内の重度の障害がある子どもの親御さんたちの市民運動として、たんぽぽの家の活動がはじまりました。1976 年からはじまった「わたぼうし音楽祭」は、障害のある人の詩にメロディーをのせて歌う音楽祭で、現在でも続いています。当初は、障害のある人が舞台に立つ機会そのものが少なかったのです。また、福祉の分野だけではなく当時の音楽の分野で活動する若者たちがこの運動に参加したということが、たんぽぽの家の土壌づくりに大きく関わっています。アート、音楽にとどまらず多様な出自のスタッフがいて、ボランティアに対していつでも開かれているのは、市民運動としてのわたぼうし音楽祭の成果だと思えます。福祉を専門的に学んでいないスタッフもいることで、ケアする、される関係を超えた信頼関係が築けるのかもしれない。障害の種別や区分で見るのではなく、「〇〇さん」という個人



一般財団法人たんぼの家と社会福祉法人わたぼうしの会とボランティア団体である奈良たんぼの会からなる。「障害のある人たちの生きる場づくりから、個を支えあうコミュニティづくりへ」というスローガンを掲げ、芸術文化活動を核とした地域に開かれた活動の場(アートセンター HANA, Good Job! センター香芝、等)を設置し、障害のある人たちの可能性を追求するアートプロジェクトや調査研究(エイブル・アート・ムーブメント、ケアする人のケアプロジェクト等)を先駆的に実施してきた団体。

〒630-8044
奈良県奈良市六条西 3-25-4
TEL: 0742-43-7055
FAX: 0742-49-5501

として関わる事ができているように思います。もちろん、重度の障害のある人の対応をする場合には、障害福祉分野の専門性も必要ですが、たんぼの家ではメンバーの可能性をいかに引き出し高めていくかということを大切にしているので、目に見えない可能性に気づき、育むスタッフの役割が問われます。

アート、障害者福祉の捉え方

活動の目的は、アートを通して人が豊かに生きる関係や環境を作るということ。アーティスト育成だけが目的ではありません。もちろんメンバーの中には実際にアーティストとして作品が売れたり活躍している人もいますが、メンバー本人が家族やスタッフと話す中で自分が活動したいか、方向性を決めています。個人的な楽しみとして表現をすることも否定しません。アート活動をしていないメンバーもいます。突然描けなくなる期間もあるでしょう。その時は、その人がいちばん楽しめたり落ち着けることを一緒に探して、他のプログラムを提案していきます。

障害のある人は、生きる上で様々な選択の機会が限定されがちです。「豊かに生きる」ことは「選択肢が多い」ということにも

つながりますが、アートはその選択肢の一つです。作品として発表するかしないかも、スタッフとメンバーがコミュニケーションする中で決めていきます。また、ここでは1から10まですべて1人で作品を作るという人はあまりいません。それぞれ必要な部分でスタッフのサポートが入ります。極端な例では、自分では手を動かさずにスタッフに指示を出して作品を作らせるディレクタータイプのメンバーもいます。

作品は結果であって、それだけを目指していると、作品を作らない人はできない人ということになってしまいます。成果だけで評価しない、多様な選択肢を提示できることが大切だと思っています。

こういう活動を通して、地域の文化度を上げていきたいと思っています。奈良は伝統的な芸術・芸能に触れる機会が多いですが、現代アートに触れる機会が少ないです。その中でも、地域アートと関わる人たちとのつながりができ、障害者アートではなく、同時代のアートとして紹介することが増えています。

1995年から「エイブル・アート・ムーブメント」というアートの社会化、社会のアート化を目指す活動を行なっています。専門家に限らず市民自らが芸術・文化を作ったり、楽しんだりする環境を作ることがテーマです。そもそも、障害のある人たちとの日常活動の中に新しい価値を発見し、育む環境を作ってきた結果、障害者アートのカテゴリーとして取り上げられることも多いですが、アートの世界で障害のあるなしを分ける必要はあるのかということも伝えたいです。

生きづらさをかかえる人たちはたくさんいます。障害のある人が作ったというだけで作品が評価される時代ではないと感じています。

地域、行政との関わり

奈良たんぼの会主催のバザーが春と秋にあり、実は「たんぼ



メンバーの制作の様子

ぼといえはバザー」と呼ばれるぐらい地域の人に愛されています。この周辺の西ノ京、学園前という地域は住宅が多いため、バザー用品の回収に行きます。常連のお宅はあらかじめ準備していた物品を提供してくださり、毎回かなり大規模に実施できていて、収益にもなっています。

その他にも、自治会に参加したり、メンバーがアートワークショップをしに小学校へ出掛けたりしています。たんぼぼの家のホールを地域の合気道や書道の活動に使ってもらうなど、福祉施設を地域の資源として利用してもらっています。

また、2年前に完成した福祉ホーム「有縁のすみか」に併設されている「六条山カフェ」も地域の常連の方やサークルなどでの利用が増えています。

財団の運営の大部分は、現在、国や行政、企業からの事業受託や協賛で成り立っています。「奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA」は立ち上げの時期から県の障害福祉課と進めてきました。障害とアートに関するネットワークやノウハウは長年活動している私たちには蓄積があったので、障害福祉の枠を超えて文化振興に必要だと思うことを提案してきました。例



えば、障害のある人とアーティストがコラボレーションする「アートリンク・プロジェクト」や、県内の学校、病院などにアーティストが出向く「アートクル・ドキュメント」など。さらに、2014年度からは厚生労働省「障害者の芸術活動支援モデル事業」（2017年度から「障害者芸術文化活動普及支援事業」）で、調査研究や発信事業もしています。県下の障害福祉施設を対象にアートが活用されているか、現場では何が必要で何に困っているのかなどアンケートや訪問調査でニーズを探っています。また、「障害とアートの相談室」として相談を受けたり、課題を共有し学びあう機会を作ってきました。

国や行政の事業は、どうしても年度単位のプロジェクトになってしまうので、長期的なプログラム実施は難しいことが多いです。助成元の求めることを汲み取りつつも、現状や課題をもとに新しい価値や意義を提案していくことを心掛けています。企業の社会貢献活動や、「エイブルアート・カンパニー」などの広告代理店、アパレル、製造業者、クリエイターなどを相手にした著作権取引などは、一度成功すると継続していくように思います。全体的にどうしても外部から依頼を受けた仕事が増えてきているのです



が、日頃から小さくても自分たちでプロジェクトを立ち上げていくことも大事だと思っています。

奈良たんぼぼの会は運動を支えるボランティア団体ですが、全国にいるたんぼぼのファン（会員）をつなげています。お誕生日基金という仕組みがあって、会員が誕生日になるとお誕生日カードを届けていて、一口2,000円で寄付をしてもらう仕組みを作っています。このファン一人ひとりの支援が、たんぼぼの継続的な運営を支えていると思います。